近世・近代の東総における相模大山信仰

参詣講の再編成をめぐる諸問題

菅根幸裕

The Sagami Oyama Faith in Toso during the Early Modern Period: Various Issues Surrounding the Re-organization of Parishioner Association

❶相模大山とは
❷問題の所在
❸龍福寺奉納木太刀と溝原村石尊講
❹御師増田家史料にみる東総地域の大山信仰
おわりに

【論文要旨】

神奈川県伊勢原市の相模大山は、古来関東を中心に多くの人々の信仰を集めてきた。現在まで、その信仰の流布に寄与した大山御師の活動については、田中宣一氏をはじめ多くの業績がある。すなわち、近世後期、大山不動を中心にした信仰が隆盛した過程について、旧御師に伝わる台帳から数的に論証しようとしたものである。

本稿は、こうした先行研究をふまえ、参詣者側の史料から、千葉県の東総地域をモデルに、近世・近代における相模大山信仰の形成と展開を分析することを目的とする。方法としては、まず海上町龍福寺に伝わる、宝暦十三年（一七六三）奉納の木太刀の銘文及び関連史料を分析して、この地域における大山信仰圏と大山講の構造を考察する。さらに、このデータを、参詣者を宿泊させた大山御師側の記録と照合する。このように、地域を限定し、信仰を付与した側と信仰を受容した側の両方の史料を比較検討することにより、宗教者側が信仰を獲得する方法と、参詣者が信仰を受容する基準が明らかになると考えた。次に、神仏分離による信仰の主体の変化と、参詣者の対応を考察する。すなわち、木太刀を奉納する対象であった大山不動が排除され、阿夫利神社へと一方的に信仰の主体が移行したことに対して、東総地域の人々がいかに反応したかを、大山御師側の史料を中心に分析するものである。その結果、近世中期の段階で、東総地域の大山信仰は、龍福寺を中心とした小規模なものであったが、近世後期に、大山御師増田源之進家が熱心な檀那場開拓を東総地域で展開したために、いわゆる大山講が形成されていったことが明らかになった。しかし、近代以降、大山側が神仏分離を推進し、大山不動の講を神道に基づく「敬神講」に再編成しようとしたが、二割程度しか成功しなかった。また、大山信仰と大原幽学の性理学との関係は明確ではないが、近代以降、神道化した性理学と、この「敬神講」の教義が一致したのか、性理学地域には「敬神講」が形成されたことが判明した。

❶相模大山とは

相模大山は、標高一二五一メートルで、神奈川県伊勢原市にあり、古くから大山寺の不動尊及び山上の石尊大権現に、関東一円の信仰が寄せられてきた。その信仰圏を示す好史料に明治十六年（一八八三）までに作成された『開導記』[1]があり、当時、関東六県及び福島県、新潟県、静岡県にかけて実に一万五九八一村で九〇万九七四三軒もの壇家があったと記載されている。[2]

大山の起源については、西垣晴次氏の論考「大山とその信仰」[3]が詳しいが、享禄五年（一五三二）の奥書を持つ大山寺の縁起には、天平勝宝七年（七五五）に良弁が開いたと伝えている。また、大山の阿夫利神社は、十世紀の『延喜式』神名帳に、「阿夫利神社」の名が見え、大山信仰の原型は古代には形成されていたと考えられている。鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』には「相模国大山寺免田五町、畠八町任先例可引募之田、今日下知給」とある。すなわち、阿夫利神社が、大山寺として寺領が認められており、すでに神仏習合を経た形態が示されている。その後、足利尊氏、関東管領や小田原北条氏の保護を受けた。さらに、江戸時代の初めには、碩学領五七石が寄進され、また、古義真言宗の道場として復興することが求められた。その中心である八大坊には、慶長十五年（一六一〇）に寺領百石が与えられた。[4]寛永十年（一六三三）の『関東真言宗古義本末帳』[5]によれば、大山八大坊は、高野山を本山とし、常法談所となっている。その下の供僧は一一の坊を支配し、衆徒一三人と合わせて僧侶が二五人となっている。また、「このほか無供の交衆員数をさだめず」とあり、大勢の修験や御師がいたと考えられる。例えば、宝永七年（一七一〇）三月二十七日、大山を訪れた紀伊国出身の六十六部廻国行者中山作太夫は、

同国（相模国）大山ふどうごんげん様へ参、御ちきやう百五十石付、ふもとに千軒町屋有、天下ふしん所[6]

としており、この時期、すでに山麓に多くの人々が在住していたことを示している。

天保十二年（一八四一）に成立した『新編相模国風土記稿』では、頂上の石尊社・前不動が信仰の中核で、別当八大坊を中心に、供僧一一ヶ寺、燈明坊一ヶ寺、脇坊六ヶ寺、承仕四ヶ寺、修験八ヶ寺、神家八軒、末寺一ヶ寺があり、さらに一六六軒もの御師がいたとしており、この時期の隆盛ぶりが窺える。こうした繁栄の基となった檀那場の形成については、圭室文雄氏によって分析が加えられている。圭室氏は、高野山高室院の史料から、慶長年間に、高野山参詣に際し、大山御師がその檀那場の檀家を手引きしていることが紹介されており、すでに寺檀関係が成立していたことを示している。[7]一方、檀家売買についての史料は寛文五年（一六六五）八月が初出で、武蔵国橘樹郡と都築郡が対象となっている。[8]また、「檀那帳」「檀廻帳」では延宝三年（一六七五）二月に地元相模国を対象としたものが一番古い。[9]檀那帳の冊数は、元禄期・享保期から少しずつ増加し、文化・文政年間に急増する。[10]このことは、江戸中期までゆっくりと大山信仰が定着し、江戸後期から急激に信仰圏が拡大したことを示すと考える。

実は、檀那帳の初出でもある延宝三年には、十一月に、房総で早くも檀那場が売買されている。これは具体的には「西上総国峰下領旦那場廿村余之所、合而旦那数四百八拾八軒」を二二両で売り渡した証文であり、[11]すでに檀那場が、内房地方南部に定着していたことを示している。そして、同時期に、江戸湾を隔てた相模国三浦郡を対象とした檀那売買史料や檀那帳が伝来しており、大山信仰が庶民層に定着したのは、江戸湾を挟んだ内房と三浦半島からであったことが理解できる。江戸の檀那帳は、宝暦十年（一七六〇）から、[12]下総国は、葛飾郡・印旛郡の安永七年（一

七七八)[13]、今回対象とする海上郡・香取郡の東総地域となると天保三年(一八三二)[14]まで待たなければならない。

一方、房総側の参詣等の史料となると、管見のところ海上町岩井の龍福寺に奉納された、宝暦十三年(一七六三)の木太刀銘文が最古のものである。この木太刀は全長三メートル七九センチもあり、びっしりと大山講員の名が墨書されている。本稿では、この太刀を題材に考察する。

❷問題の所在

相模大山信仰の発展については、その流布に寄与した御師の宗教活動を中心に、現在までに多くの業績がある。まず田中宣一氏は、はやくから御師と檀家の構造分析に取り組んでおり、その成果は「相州大山講の御師と檀家—江戸末期の檀廻と夏山登拝をめぐって—」[15]をはじめとする一連の論考にまとめられている。また、鈴木章生氏は、歴史民俗学的アプローチから、大山の信仰圏は、農耕守護神及び死霊鎮座・修行霊場・徐災招福の三種類に分けられるとする論考を著しており興味深い。[16]こうした大山に関する研究業績を集大成したものが『論集　大山信仰』(圭室文雄編　雄山閣　平成四年)である。所収論文のほとんどが、大山先導師家に伝来する史料を分析したものであり、近世後期、大山不動を中心にした信仰が隆盛した実態を、史料にみる檀家数の増加から論証しようとするものである。その中で唯一吉岡清司氏の論考「大山信仰と納太刀」[17]は、前述した海上町龍福寺の木太刀の朱書を中心に、信仰を受容した在地からの調査結果が示されていて貴重である。

そこで、本稿では、この龍福寺の木太刀をさらに精査し、その結果をてがかりに、東総地域の大山信仰について考察を試みることとする。

方法としては、まず、木太刀に記載された、村名及び人名を図表化して分析を加え、宝暦十三年(一七六三)当時の信仰圏を明らかにするとともに、周辺の近世史料から大山信仰に関する事項をピックアップして、実態をより明確にする。次に大山側の記録、すなわち東総地域を巡った大山御師増田源之進家の記録と照合し、分析を加えてみたい。すなわち、信仰を付与する者と受容するものの接点にこそ、信仰の実態を明らかにする要素が多く含まれるとするもので、両者の史料を比較検討することにより、信仰の形成と展開を明確化できると考えたためである。次に、神仏分離以降、大山不動から阿夫利神社へ主体が移行した後の信仰の変容について、考察してみたい。

一般に、山岳信仰は、神仏分離を中心とする明治新政府の宗教政策の為に、衰微していったと解釈されている。しかし、筆者が調査した出羽三山や下野国石裂山(鹿沼市)では、信仰形態の変容とともに、信者も減少したが、その一方で、宗教者側は近代化に対応した形で信仰を持続しようという努力がなされている。相模大山についてはどうであろうか。そうした実態を大山側の近代史料から分析していきたい。特に、「大山敬慎講」が形成された後の信仰の様子を、同地域の大原幽学創始の性学の動向と関連づけて述べてみたい。

❸龍福寺奉納木太刀と溝原村石尊講

(1)滝不動龍福寺と木太刀

千葉県海上町岩井の新義真言宗智山派龍福寺は、弘仁六年(八一五)弘法大師が不動明王を刻み、本尊として安置したと伝承される古刹である。また、本堂裏にある滝に由来して滝不動ともよばれ、古来遠近の信仰を集めていた。特に江戸時代には、本尊不動明王が、船が難破しそうな時に海中から助けに現れてくれるとして、九十九里浜の漁師や廻船問屋の間で爆発的な信仰が寄せられた。[18]本堂には、こうした不動の霊験を描く絵馬や、善光寺参詣記念の奉納額等が多く掲げられている。その中

に、前述した木太刀が梁の上にあげられていた。

衆知のように、江戸後期、相模大山参詣時には、木太刀を担いで行く風習があり、この太刀もそうしたものであろうことは予想されていたが、海上町史の編纂にあたり、梁から降ろされ調査が加えられた。筆者も都合五回ほど龍福寺を訪れ調査したが、この木太刀は松材で、長さは三・九六メートル、身幅は三二・五センチ、鎬造りで樋が入り、中帽子であることが判明した。茎には目釘穴が二カ所もあり、かつては柄が存在し、擦り上げが施されたようにも見える。

(2) 木太刀の構造と願文

太刀は、一般に刃先を向かって右にする面を表とするが、表には、身幅いっぱいに不動立像が銅板で打ち付けられ、やはり銅板で「奉納石尊大権現　講中」の文字がうたれている。また茎部分には「会所　溝原邑高木忠助」と朱書されている。裏には庵部に「月参大願成就　宝暦十三年辰年六月　初山迄三年也」とあり、鎬以下の刃部には多くの村名・人名が朱書されている。「東京本所　奇川」と印刷された千社札が一枚中程鎬部に貼り付けされているが、かつてはこの木太刀は、梁の上にあげられていたのではなく、本堂のもっと下部に奉納されていたとも考えられる。

前述したとおり、この木太刀については、海上町史編纂時の一九八三年に、吉岡清司氏によって分析された論考がある。[19] 吉岡氏は、風化のため消滅しかけた朱書を丹念に調べ、貴重な資料を提供しているが、残念なことに論考では、村名のみが列記され、現海上町内の人名しか紹介されていない。「町史研究」という性格上これはやむを得なかったものと思われる。一九九七年から一九九八年にかけて筆者は、龍福寺の協力を得て、赤外線等も使用しながらこの木太刀を調査することができた。吉岡氏の論考を基としながら、木太刀銘文の分析を試みたい。

まず、「月参大願成就　宝暦十三年辰年六月　初山迄三年也」という願文は、吉岡氏も指摘しているように、宝暦十三年（一七六三）当時、それまでの三年間龍福寺に月参りをして、初めて大山に登ることができた事を示している。そしてこの木太刀を大山まで担いでいき、持ち帰ったものを奉納したものであろう。「会所」とは何であろうか。近世以降東総地域に檀那場を持っていた大山御師増田源之進家に伝わる「新生村飯沼村御陳中軒別手控」[20] には、「会所」が人名と同列に列記されている。木太刀裏の願主の連名の中には表にある高木忠助の名前はないことから、おそらく、「会所」は、役元もしくは講元であったと考えられる。この会所が当番制か世襲的なものかは不明であるが、いずれにせよ当時この石尊講が、溝原村を中心に組まれていたことがわかる。

(3) 朱書された村名・人名について

木太刀の裏に朱書された多数の村名・人名は次の（史料1）の通りである。番号は筆者が付したものである。

（史料1）

	願主連名	
1	古内村	酒屋佐平次
2	宮前村	惣之丞
3	長部村	勘左衛門
4	関戸村	高木勘兵衛
5	諸徳寺村	酒屋利左衛門
6	同　村	石毛弥惣次
7	新　町	惣　介
8	同　町	武藤餘八郎
9		石塚佐七郎
10	琴田村	吉兵衛

11 大田袋　源四郎
12 成田村　総右衛門
13 〃　水野治郎左衛門
14 後草村　嘉兵衛
15 仁玉村　加藤(カ)惣七
16 見廣村　甚左衛門
17 大間手　壇上彦左衛門
18 岩井村　弥兵衛
19 〃　伝右衛門
20 清瀧村　飯田兵右衛門
21 〃　忠兵衛
22 松ケ谷村　□□伊兵衛
23 幾世村　□□□□□
24 夏目村　□□次郎兵衛
25 小南村　□□市兵衛
26 粟野村　□□左兵衛
27 青馬村　彌左衛門
28 八重穂村　作兵衛
29 大久保村　堀口弥兵衛
30 船戸村　酒屋茂右衛門
31 萬歳村　花香弥□□□
32 〃　太□□□
33 〃　治□□□□□
34 〃　平□□□□□
35 〃　多　助
36 桜井村　石井□□□□
37 神田村　菅谷□□□□□
38 和田村　渡辺八右衛門
39 稲荷入　菅谷□□□□
40 阿玉村　治右衛門
41 五郷内村　儀左衛門
42 久保村　忠左衛門
43 萬歳村　吉兵衛
44 小貝野村　与兵衛
45 貝塚村　甚□□□□
46 久保野谷　忠左衛門
47 清瀧村　儀左衛門
48 高部村　新左衛門
49 府馬村　仁右衛門
50 笹川　七郎兵衛
51 〃　栄屋平七
52 阿玉村　武左衛門
53 河上村　右馬之助
54 田部村　惣左衛門
55 〃　林　蔵
56 長部村　伊兵衛
57 府萬村　武右衛門
58 〃　勘蔵
59 〃　新八
60 〃　忠兵衛
61 桐谷村　長右衛門
62 長部村　庄右衛門
63 新里村　元右衛門
64 万力村　伊左衛門

65 鏑木村 □□衛門
66 堀之内村 恭　平
67 松沢村 嘉　平
68 高生村 浄□院
69 小堀村 円□寺
70 上総□田村 □□衛門
71 新□□ 九□□□
72 小見村 □□□□
73 井戸野村 甚左衛門

月参講中参詣人数　巳六月初山

74 関戸村 忠四郎
75 琴田村 □□□□
76 古内村 庄蔵
77 溝原村 与平次
78 稲荷入村 重左衛門
79 岩井村 弥平
80 幾世村 宗五郎
81 高部村 儀左衛門
82 阿玉村 宇兵衛
83 清瀧村 五右衛門
84 川上村 傳二郎
85 浅田村 長十郎
86 江ケ崎村 忠右衛門
87 夏目村 藤左衛門
88 〃 長右衛門
89 溝原村 常光寺
90 小堀村 清治郎
91 諸徳持村 庄治郎
92 府馬村 利左衛門
93 長部村 吉左衛門
94 宮前村 善十郎
95 小見村 甚左衛門
96 稲荷入 正左衛門
97 万歳村 円正院
98 〃 長右衛門
99 和田村 安□□□
100 浅田村 源太郎
101 久保村 七兵衛
102 琴田村 兵右衛門
103 古内村 甚□□□
104 小見村 清右衛門
105 松沢村 □□□□
106 小堀村 権四郎
107 田部村 伊右衛門
108 浅田村 庄介

宝暦十三未歳十月参

109 府馬村 吉兵衛
110 桜井村 忠兵衛

宝暦十二歳六月参

111 夏目村 甚右衛門
112 新町村 七郎兵衛
113 長岡村 忠左衛門
114 神田村 林　蔵

115 八重穂村 庄兵衛 140 渡邊長兵衛
116 松沢村 権兵衛 141 高木長五郎
117 入野村 徳左衛門 142 高木治郎右衛門
118 大久保村 市兵衛 143 大添忠四郎
119 小見村 144 寺嶋藤三郎
120 小堀村 145 高木長左衛門
146 大根平蔵
溝原村願主 147 高木市三郎
121 常光寺 148 高木惣四郎
122 明泉寺 149 高木佐平次
123 菅谷儀兵衛 150 高木宇八郎
124 鈴木平七郎 151 鈴木利右衛門
125 鈴木七右衛門 152 鈴木利左衛門
126 鈴木徳右衛門 153 鈴木伊兵衛
127 高根太七 154 鈴木縫右衛門
128 大添(カ)安介 155 大根庄介
129 高木万蔵 156 大根伊介
130 菅谷喜七郎 157 高木嘉兵衛
131 菅谷和五郎 158 高木吉右衛門
132 菅谷重五郎 159 高木嘉右衛門
133 菅谷重蔵 160 □□□兵衛
134 菅谷弥四郎 161 渡邊重左衛門
135 渡邊仙蔵 162 渡邊□右衛門
136 渡邊和惣兵衛 163 高木惣左衛門
137 寺嶋太兵衛 164 寺嶋権四郎
138 菅谷忠之介 165 高木□□郎
139 菅谷喜兵衛 166 菅谷宇左衛門

大山御太刀奉納同行連名

167　溝原村　明泉寺
168　治兵衛
169　宿主　□□□□
170　茂□□□
171　万□□□
172　□□□吉
173　□□衛門
174　三郎左衛門
175　岩井村　□□□□
176　嘉右衛門
177　□□□□
178　清瀧村　□蔵
179　夏目村　源兵衛
180　□□□□
181　□□□　万右衛門
182　神田村　五□□□
183　松ケ谷村　□□□□
184　□□□□　清蔵
185　□□□□　□治郎
186　江ケ崎村　□□□□
187　阿玉村　□□□□
188　関戸村　□□□□
189　□□□　□□□□
190　小貝野村　□□□□
191　新町村　□□□□
192　長岡村　□□□□
193　大寺村　□兵衛
194　小堀村　源右衛門
195　古内村　□□□□
196～205　以下10名村名人名不明

これは太刀の記載順に列記したもので、合計五七ヶ村、二〇五名を数えることができる。吉岡氏は前述の論文で四七ヶ村、一九七名をあげている。その内訳は、「願主連名」として六六名、「月参講中参詣人数　巳六月初山」（以下「月参参詣」）として九三名、「大山御太刀奉納同行連名」（以下「太刀同行」）として三八名をあげている。今回調査した結果「願主連名」は七三名、「月参講中参詣」が四七名、その次に「溝原村願主」が書かれており四六名が列記されていた。おそらく吉岡氏はこれを「月参講中参詣」の中に入れてしまったものであろう。「太刀奉納同行」は三九名である。実は太刀の茎近くから、「願主連名」「月参参詣」「溝原村願主」「太刀同行」と刃先に向かうに従い字がかすれて見えなくなる。おそらく「太刀同行」はまだ何名か書かれていた可能性もあるが赤外線フィルムでもこれが限界であった。今回一二ヶ村が新たに判明できたが逆に、吉岡氏があげている宮本村と平山村を見つけることができなかった。

これら、村名を五十音順に並べたのが表1である。上総国の一村は字が判読できないので最後に入れた。「願主連名」の七三名と「溝原村願主」の四六名は、いわゆるスポンサーで、大山講を構成しながら実際には参詣しなかった者であろう。「月参講中」こと「月参講中参詣人数　巳六月初山」の四七名は、この講の中心で、龍福寺に三年間月参りして初めて参詣することができた者を示すと考える。これらが正式の代参メンバーで、「大山御太刀同行」の三九名は、このメンバーではないが同行した者であろう。

「月参講中」の中で　108番の浅田村の庄介は同年十月に、110番の桜井

村の忠兵衛は前年の六月に大山参詣をしていることが、墨書で追記されている。これは、この時の代参とは別に、改めて他の講中で参詣したことを示すものであろう。

表1の項目と地名を比較すると、各村に一～三名ずつ散らばっており、村でかたまって願主になったり代参者を出した所は溝原村を抜かして一村もない。例えば3番の青馬村は、「月参講中」すなわち月参りをして初山として代参する者が一名、同行するものが一名である。54番の浅田村は「月参講中」だけが三名、12番の笹川村は願主のみ二名である。

何といっても溝原村の五六名が目を引く。実は同村の明細帳では寛政十年（一七九八）で家数三三、弘化二年（一八四五）では四五となっている。[21] 全村で講中に参加しているものかどうか不明であるが、一軒で複数の願主もしくは参詣者をだしていることがわかる。「願主連名」以下の項目に重複する人名は見あたらないことから、スポンサーとしての願主が実際に月参りをして大山登拝を試みることは、なかったと考えられる。ただし、溝原村の常光寺と明泉寺だけは、「溝原村願主」に名を連ねながら、常光寺は「月参講中」として、明泉寺は「太刀同行」とし

表1　龍福寺木太刀に書かれた村名と連名種別

	村　名		願主連名	月参講中(巳6月初山)	溝原村願主	大山御太刀同行	合計	備　考
1	阿玉村	小見川町	2	1	0	1	4	
2	久保村	小見川町	1	1	0	0	2	
3	青馬村	東庄町	0	1	0	0	1	
4	粟野村	東庄町	1	0	0	0	1	
5	稲荷入	東庄町	1	2	0	0	3	
6	大久保村	東庄町	1	1	0	0	2	
7	貝塚村	東庄町	1	0	0	0	1	
8	神田村	東庄町	1	1	0	1	3	
9	小貝野村	東庄町	1	0	0	1	2	
10	五郷内村	東庄町	1	0	0	0	1	
11	小南村	東庄町	1	0	0	0	1	
12	笹川村	東庄町	2	0	0	0	2	
13	高部村	東庄町	1	1	0	0	2	
14	夏目村	東庄町	1	3	0	1	5	
15	舟戸村	東庄町	1	0	0	0	1	
16	八重穂村	東庄町	1	1	0	0	2	
17	和田村	東庄町	1	1	0	0	2	
18	入野村	干潟町	1	0	0	0	1	
19	鏑木村	干潟町	1	0	0	0	1	
20	桜井村	干潟町	1	1	0	0	2	
21	諸徳寺村	干潟町	2	1	0	0	3	
22	関戸村	干潟町	1	1	0	1	3	
23	長部村	干潟町	3	1	0	0	4	
24	松沢村	干潟町	1	2	0	0	3	
25	万力村	干潟町	1	0	0	0	1	
26	万才(歳)村	干潟町	6	2	0	0	8	円正院
27	溝原村	干潟町	0	2	46	8	56	常光寺・明泉寺
28	小見村	山田町	1	3	0	0	4	
29	川上村	山田町	1	1	0	0	2	
30	桐谷村	山田町	1	0	0	0	1	
31	田部村	山田町	2	1	0	0	3	
32	長岡村	山田町	0	1	0	1	2	
33	新里村	山田町	1	0	0	0	1	
34	府馬村	山田町	1	2	0	0	3	
35	古内村	山田町	1	1	0	1	3	
36	宮前村	山田町	1	1	0	0	2	
37	井戸野村	旭市	1	0	0	0	1	
38	江ケ崎	旭市	0	1	0	1	2	
39	大田村	旭市	1	0	0	0	1	
40	新町村	旭市	1	1	0	1	3	
41	成田村	旭市	1	0	0	0	1	
42	仁玉村	旭市	1	0	0	0	1	
43	後草村	海上町	1	0	0	0	1	
44	幾世村	海上町	1	1	0	0	1	
45	岩井村	海上町	2	2	0	3	7	
46	大間手村	海上町	1	0	0	0	1	
47	清瀧村	海上町	3	1	0	1	4	
48	琴田村	海上町	0	2	0	0	2	
49	高生村	海上町	1	0	0	0	1	浄□院
50	松ケ谷村	海上町	1	0	0	1	2	
51	見広村	海上町	1	0	0	0	1	
52	大寺村	八日市場市	0	0	0	1	1	
53	堀之内村	八日市場市	1	0	0	0	1	
54	浅田村	?	0	3	0	0	3	
55	小堀村	?	1	3	0	1	5	円□寺
56	上総？村	?	1	0	0	0	1	
	合計		63	47	46	24	180	

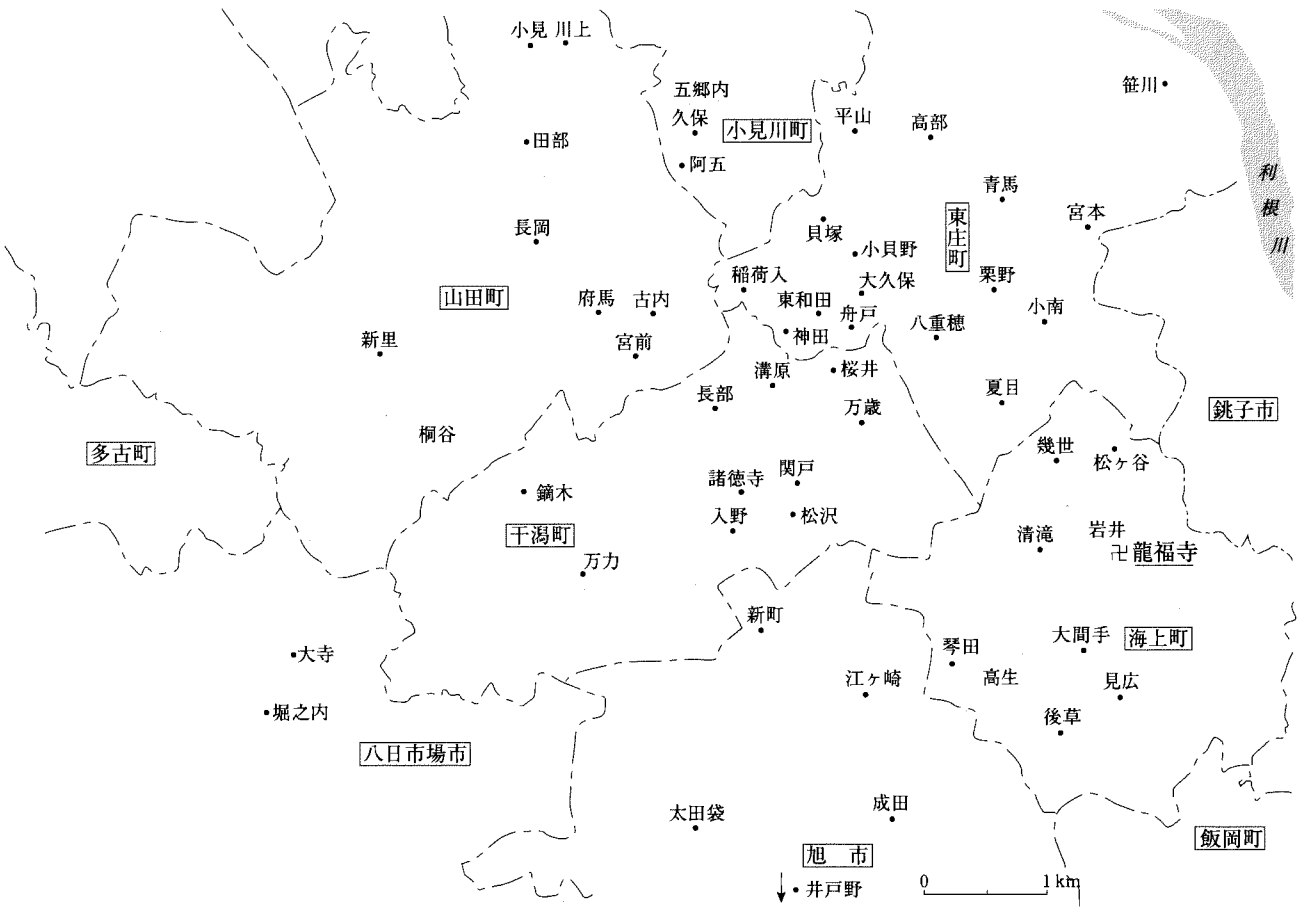

図1　龍福寺木太刀に朱書きされた地名

て大山に代参している。一般に宗判寺院は、真言宗系であれば高野山参詣とか日蓮宗ならば身延山参詣とか、その寺院の属する宗派に関与する目的地に対して、檀家組織を中心として参詣を企画する場合が多い。真言宗の両寺院は、溝原村の願主として最初にあげられていることから、当初からこの石尊講の中心となる構成員であったのではなかろうか。

以上のように、この木太刀は、溝原村の石尊講に近隣の村々が加わっていった事を示している。そして「モノマイリ」として、道中安全を、龍福寺に祈願し、その成就を感謝して奉納されたものと考える。

図1は、表1で出てきた村名を現行市町村の境界線を入れた地図におとしたものである。現在干潟町にある溝原村付近に密集しているものの、旭市・八日市場市のも散在している。よってこの村々が、講として結成された要因が問題である。

また、(史料1)でわかるとおり、女性は一名も参加していない。房総の他の地域では、近世の段階で、女性が通過儀礼的に参加している場合もあるが、東総では触穢の観念が強かったのであろうか。

(4) 東総地域の大山参詣史料

さて、次に、この木太刀の示す内容を補足する地元の史料から、当時の大山信仰の実態をより明らかにすることにする。しかし、大山の講中記録は、東総地域には一点も伝来せず、やむなく地方史料の日記等をしらみつぶしにあたり、大山講に関する記述を探索することとした。こうした

調査で唯一発見できたのが、次の（史料2）である。[22] これは米込村（干潟町）の名主杉崎家に伝来するもので「天保十五年　日記帳　杉崎氏」と表題のある年中行事記録である。その七月の部分に以下の記事がある。

（史料2）

（七月）

八日　天気　大山石尊大権現参詣立、大和田泊リ

九日　天気　江戸

十日　天気　長後追分泊リ

十一日　天気　大山源之進行　大山渡御

御山仕舞、田村迄下リ

十二日　天気　江ノ嶋鎌倉通リ、夫より十塚（戸カ）迄来泊

十三日　天気　江戸迄来

十四日　天気　同所　泊リ

十五日　雨ふり　〃　泊リ

十六日　臼井泊

十七日　雨　加茂泊リ　大嵐

十八日　天気　目出度帰村

十九日　霧ふり　休　夜より大会

廿日　雨ふり　御座（ママ）あみ

廿一日　雨ふり　御座（ママ）あみ

廿二日　天気　町田惣堀ふしん

極めて簡単な紀行文である。まず、七月八日に米込村を出発し、佐倉道を上り、一気に大和田宿（八千代市）まで到達する。翌九日は江戸に入り、十日は長後追分（大和市）泊り、十一日には御師増田源之進方の先導で、大山を登拝し、大山には泊まらず相模川西岸の田村渡（平塚市）まで降りてくる。十二日は、江ノ島と鎌倉を経て東海道戸塚宿（文中では十塚、横浜市）に泊まり、十三日から十五日まで江戸に留まっている。十六日には臼井宿（佐倉市）に宿泊する。翌十七日は加茂村（芝山町）となっているが、ここは宿場でもなく、大嵐のためにやむをえず一宿を農家に頼んだものであろう。十八日に「目出度帰村」となり、九泊十日の参詣が終了する。翌十九日は旅の疲れをとるため一日休み、二十日と二十一日は雨天ということもあったのか、莫蓙編みに終始している。十九日の夜分に「大会」とあるのは、いわゆる「砂払い」であろう。

この参詣は、経路や日数は一般的なものの、際だった特徴として、本来の目的である大山参詣が日帰りで済まされていることがあげられる。通常、御師方に宿泊する「坊入」がこの参詣の主目的であり、二～三日かけて大山不動へ木太刀を納め、山頂の石尊権現を参拝するのである。しかし、そのような宗教的な行事は記載されておらず、御師である源之進は先導のみである。その代わり江戸には三日も逗留している。

筆者はかつて、上総国夷隅郡作田村（夷隅町）の吉原家に伝わる一一冊の参詣記録を分析したことがある。[23] それらの作成された時期は、この米込村の記録と同じ文政五年（一八二二）から文久二年（一八六二）にかけてである。参詣日数も一〇～一二日とほぼ同一であり、経路も相違がない。しかし、この一一冊全てに「坊入」の記述があり、御師方で参詣者は、一人金一分の宿泊料のほか、御師の内室・子供から使用人まで祝儀を渡し、また初穂も納めている。そして、御師の先導で二泊三日かけて登拝している。江戸にも浅草観音参詣等の目的で、二日程逗留しているが、「坊入」を簡略している事例はない。米込村が、「坊入」を省略した本末転倒ともいえる大山参詣を行った理由は何であろうか。

❹御師増田家史料にみる東総地域の大山信仰

（1）『開導記』にみる東総大山信仰

次に、東総地域を訪れた大山御師側の史料を分析してみることとする。

明治十六年（一八八三）の檀那場一覧である『開導記』には、東総地域について以下のとおり記載されている。まず香取郡を檀那場にする先導師[24]は九名で、檀那場として記載された町村数は二六四、明治十四年（一八八一）に内務省地理局が出版した『郡区町村一覧』では町村数が二七三となっているから約九五パーセントの町村に参詣講があったというものである。同様に海上郡は御師は二名で、九九パーセントの町村に講があり、匝瑳郡は御師が三名で八〇パーセントの町村に講があると算出している[25]。よって、三郡全体で九〇パーセント以上の町や村に、大山講の檀那が存在したことになるが、この割合は、関東ではほぼ均一の数値であるとされている。

しかし、この『開導記』については、いくつかの問題点があることが指摘されてきた。例えば、神仏分離を経た後の統計であること、中には明治十六年の段階では実際に檀家との交流はなくても、江戸時代の檀家数をそのまま書いてある場合も見受けられることなどである[26]。筆者も『開導記』に示された大山講の隆盛に比べ、大山参詣に関する在地側の史料があまりに少ないことから、この数字は、講そのものが重複しているか、配札する権利のある村を列記したにすぎないのであって、参詣組織の実数ではないと擬視していた。すなわち、その村に信仰組織としての講はなく、御師の配札や勧化に応対するのみの場合でもカウントされていると考えた。そして、その応対の費用は村入用によるものも少なくなかったのではなかろうか。また、一村で出羽三山や古峰神社の講が重複する場合も多いであろう。現在、本埜村の酒直卜杭地区では、同じ構成員による講が、大山、三峯、古峰を年ごとに順拝しているが、近世でも同様なケースがあったのではないかと推論する。

(2) 大山御師増田家の近世檀家帳から1—天保三年「軒別帳」

さて、この『開導記』では、龍福寺のある海上郡岩井村、木太刀を奉納した香取郡溝原村を檀那場としている大山御師として、増田源之進家をあげている。増田家の檀那場の中心は、銚子を中心とした海上郡七三ヶ村、匝瑳郡二三ヶ村、香取郡二六ヶ村であり、東総では最も檀那場数の多い御師である。

そこで、伊勢原市大山の増田家史料を調査したところ、江戸期の大山信仰史料のうち、年号が明記され、かつ東総と関係のあるものは、天保三年（一八三二）十一月の『下総国十日市場村々軒別帳』（以下「軒別帳」とする）一冊のみであった。安政二年（一八五五）から、檀那帳が五冊まとまって作成されているが、江戸御府内・相模国・常陸国のものであった。ただし、年号は明記されていないが、追記の最終が明治二年（一八六九）の東総地域の檀家帳が五冊ある。これは、大山で神仏分離を推進した権田直助が宮司となる以前のものであり、幕末期に、檀那場を順廻した記録と考えられる。具体的には『壱番　新作村より万力村迄』、『三番　万力より平木村迄』、『四番　西小笹村より岩井村迄』、『五番　鞍橋村より本所村』『三川村より行徳領二股村迄　十五番終』とあり、本来は一五冊伝来したものの五冊であることがわかる。（以下「廻檀帳」とする）

まず、「軒別帳」は、一村を例出すると、

（史料3）

軒別

十日市場村

包札　くすり　　下畑

杓子　はし　　酒屋与兵衛殿

風呂敷

同　　伊藤長左衛門殿

同　　勘兵衛殿

表2　天保3年（1832）「十日市場村々軒別帳」より

	村　名	現市町	配札法	軒数	訪問先	包札	くすり	風呂敷	杓子	はし	大札	金銭奉納	常夜燈	門札	中札	備　考
1	十日市場	旭市	軒別	140	5	1	1	4	1	1	0	0	0	0	0	札購入
2	神宮寺	旭市		390	7	3	3	1	3	3	2	0	0	0	0	名主方泊
3	東谷	八日市場市	軒別中札くすり		14	4	4	1	4	4	1	8	1	0	0	名主方泊
4	椿	八日市場市		90	11	4	6	0	7	7	6	4	0	0	0	月番名主盆一枚
5	谷中	光町		60	4	1	1	1	1	1	0	3	0	0	0	林四郎左衛門泊
6	籠辺田	八日市場市	文政14年から軒別	60	12	1	4	0	4	3	3	4	0	0	0	
7	宮本村	東庄町	登山之方へきす薬他	28	4	1	2	0	2	2	1	0	0	0	0	名主方泊
8	山崎	?（野田市）			2	0	0	0	0	0	0	初穂2	0	2	0	
9	佐倉町	佐倉市			1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	
10	佐倉肴町	佐倉市			1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	
11	佐倉鏑木	佐倉市			1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	
12	長沼	千葉市	軒別中札くすり	19	3	0	1	0	1	1	1	2	0	0	0	長沼新田8軒む
13	行徳二股	市川市		32	9	2	3	1	2	2	0	0	0	0	1	
14	酒々井	酒々井町	役人不残大札家みつくろい大札	120	7	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	
			計	939	81	18	26	8	26	25	15	24	1	4	1	

同　　伊藤六左衛門殿
同　　金左衛門殿
札　　紙屋
四十八文　　新左衛門
荷物之義、神宮寺村御送り被下候、
組頭三人
〆　百四拾軒
荷物之義　東谷村御送り被下候、

というように、御師を受け入れるのに、その村の中心となる家及び名主の名前、土産の種別、組頭の人数、配布の軒数が書かれている。「軒別」というのは、一軒ごとに配札することである。

これらを一覧にしたのが表2である。1～7の東総地域は地理的に集中しているが、他の半分は、距離を隔てて散在している。一軒ずつ丁寧に回る「軒別」の村が四ヶ所あるが、他の村では一軒に置札をして、配布は委託している。両者の違いは何によるものであろうか。また「軒別」の村、及び「軒別」ではなくとも、土産を何人もの村人に渡している村には参詣講があると見るべきであろうか。土産の内容は薬・杓子・箸が多い。同時期の出羽三山の御師は札のみであり、[27]後発の大山が、対抗措置として、房総で購入して配布したものと考える。

(3) 大山御師増田源之進家の近世檀家帳2—幕末期「廻檀帳」

前述のとおり、一方の「廻檀帳」もほぼ同様の形態で、明治二年（一八六九）が最後の追記であり、幕末期に作成されたものである。これらを一覧表にまとめたのが、表3である。地理的分布を分析するために、記載された地名を現在の香取郡、海上郡、匝瑳郡の順にまとめた。

内容を検討すると、まず、目を引くのが天保三年（一八三二）と幕末期の檀那場の村数の差である。表2の天保三年（一八三二）に十四ヶ村

であったものが表3の幕末期には約六倍の八五ヶ村に増加している。

「軒数」は各村での配札数を表すが、これも九三九軒から三九五七軒と約四・二倍である。「訪問先」は各村で人名が書かれた数、すなわちその村で増田御師を受け入れ、初穂を出した家である。「訪問先」の家は、さらに配札を請け負ったり特別祈願をしたりしたが、その数は、天保三年では八一人であったものが、六六〇人と約八・一倍となっている。

これは、約四〇年間で、増田家が檀那場を大幅に拡大したことを示している。天保三年の「軒別帳」に記載された村はほとんど幕末の「廻壇帳」と重複する。よって、増田家は「軒別帳」の村々を拠点に檀那場を開拓していったものと考える。前章（史料2）のとおり、米込村（干潟町）の天保十五年（一八四四）の日記には、大山参詣の際に増田家に世話になっているとあるので、一二年後には、近隣の村を幾つか檀那場化していたものであろう。他の御師からの檀那の購入等も予想されるが、増田家には檀那場の譲状が伝来していないので確証は得られない。

表3で明らかなように、増田家が檀那場の獲得に特に力を入れたのは、銚子及びその近辺の有力河岸であった。これら河岸の舟運による経済力も目的の一つであったと考える。

次に表3の備考欄を見てみると、「宿」が十四ヶ村で確認できるが名主方で宿泊したのは55番の十日市場村だけで、後は医者であったり酒屋であったりまちまちである。「札仕入」が三ヶ村で行われている。その内の（史料2）として紹介した香取郡米込村では「仕入」という項目で、「包札弐拾枚・大札弐拾枚・中札百拾枚・火防開運拾枚ツツ・杓子五十本・はし　壱つつみ」となっている。これらは、米込村内で隣村の名主等も集まって宴会がもたれたため、予定よりも多く配布してしまったことが書かれてあり、米込村を出発するにあたりさらに「包札五十枚・大札二百枚・半札百枚・切札五百枚・風呂敷二枚・手拭壱ツ・開運守火防守四十ツツ」を仕入れている。これらは、他村では「舟札」「門札」「家内安全札」となっており、米込村で料紙を仕入れ適宜版木を用いて刷ったものであろう。これらの運送については、

当宿へ着仕候ハハ、早速万力村役元へ家来を遣し、明朝新切重兵衛殿迄人足例年之通相頼旨申遣候事、又ハ明朝入用仕入いたし置、馬荷相送リ候旨申遣し候而も宜、都合次第可致。

とあり、到着次第家来を遣し、次に訪れる村の「役元」にあらかじめ人足を依頼していたことが分かる。こうした「宿」や他の特定の村人に、持参した札の村内配布依頼している。筆者はかつて、増田家の檀那場でもある24番の野尻村（銚子市）の安政五年（一八五八）の史料から、当時、利根川沿いの銚子から笹川にかけての各村には「売継」という役職があり、大山御師をはじめ、村を定期的に訪れた民間宗教者のもたらす札を売り継ぐなど、村側の窓口として機能していたことを紹介したことがある。[28]「売継」のいる村々では、こうした札は村入用での購入ではなく、「売継」自身が村内で転売する数だけ購入していた。「宿」は、こうした「売継」的な性格を持ったものであろう。

「初穂」については、米込村では「当村初穂ハ、村配札仕舞次第又ハ明朝酒屋孫右衛門殿方江取集」とし諸徳寺村へ送っている。

この「初穂」も米である場合が多く、荷物になるためか例えば1～15番及び64番の村で集めた初穂は、11番の諸徳持村に送っている。諸徳寺村では集積した初穂は

当村江七八ヶ村初穂集ル、当村より井戸野村宮前安右門衛門殿方へ届候様相頼、

とあり、78番の井戸野村に送っている。

井戸野村では

……村人足四軒ニ而年番ニ出ル、送馬同断、大田村迄（中略）自身ハ鎌数より始メ五ヶ村置札ニ勤、大田村江出ル……

となっており、四頭分の荷物になった初穂は別便で61番の大田村送り、

表3　幕末期「廻檀帳」にみる村々

	村　名	現市町村名	軒数	訪問先	備　考	初　穂	木太刀	天保3年	明治14年	明治14年時の信仰形態
1	神田村	東庄町	30	2	祈禱札仕入	諸徳寺集	*			
2	和田村	東庄町	4	4	軒別	諸徳寺集	*			
3	稲荷入	東庄町	60	1	上代家	諸徳寺集	*			
4	万力村	干潟町	100	5	元結付札	諸徳寺集				
5	秋田村	干潟町	18	1		諸徳寺集				
6	松沢村	干潟町	30	1		諸徳寺集	*		3	札遣す
7	堀之内村	干潟町	46	1		諸徳寺集				
8	米込村	干潟町	92	92	軒別杉崎方泊　札仕入	諸徳寺集			1	合同敬神講
9	溝原村	干潟町	60	15	茂左衛門方泊浄光寺東栄寺	桜井村届	*			
10	萬歳村	干潟町	200	47	軒別　札仕入　穴沢方泊	諸徳寺集	*		140	敬神講(太々講)
11	諸徳寺村	干潟町	70	3	永明寺	井戸野村へ	*			
12	入野村	干潟町	70	2	佐左衛門祈禱	諸徳寺集	*		16	合同敬神講
13	長部村	干潟町	12	2	遠藤伊兵衛　惣左衛門	諸徳寺集	*			
14	志高村	山田町	40	2		諸徳寺集				
15	古内村	山田町	20	5		諸徳寺集	*			
16	猿田村	銚子市	45	10	大行院・宝珠院	三川村集				
17	舟木台村	銚子市	20	1		三川村集			1	
18	生(正)明寺村	銚子市	9	1		三川村集				
19	中島村	銚子市	18	1		三川村集				
20	三門村	銚子市	24	1		飯沼へ送				
21	岡野台村	銚子市	35	1						
22	芦崎村	銚子市	80	33	役元軒別、舟持へ大札	初穂定使集			10	
23	高田村	銚子市	100	2		初穂集			72	敬神講(太々神楽講)
24	野尻村	銚子市	0	4	軒別	高田村集			12	敬神講(太々神楽講)
25	小舟木村	銚子市	30	4		高田村集				
26	塚本村	銚子市	30	4		高田村集				
27	忍村	銚子市	30	6		高田村集			40	敬神講
28	富川村	銚子市	30	3		高田村集			0	合同敬神講
29	東森戸村	銚子市	30	3		高田村集			39	敬神講
30	西森戸村	銚子市	18	3						
31	笹本村	銚子市	23	4	「河岸場」	高田村集			16	敬神講
32	下桜井村	銚子市	40	5		高田村集			5	合同敬神講
33	宮原村	銚子市	74	7	泊り　医師石上周悦	高田村集			97	敬神講(太々神楽講)
34	余山村	銚子市	28	5		垣根村集				
35	赤塚村	銚子市	40	2		垣根村集				
36	四日市場村	銚子市	50	2		垣根村集			0	合同敬神講
37	高野村	銚子市	11	1		垣根村集			64	敬神講
38	垣根村	銚子市	28	6	泊りうなぎや	垣根村集			1	合同敬神講
39	松岸村	銚子市	60	4	下町軒別50軒本村置札	飯沼届け			4	問再建勧化頼み受取
40	長塚村	銚子市	50	7	泊り酒屋	飯沼届け			7	合同敬神講
41	本所(城)村	銚子市	80	2	下町軒別47軒	飯沼届け			2	問再建勧化頼み受取
42	松本村	銚子市	50	10		飯沼届け				
43	鞍橋村	海上町	60	1		三川村集				
44	後草村	海上町	20	1		成田村届	*			
45	蛇園村	海上町	40	15	軒別（一部）	自村				
46	見広村	海上町	40	4		三川村届	*			
47	大間手村	海上町	14	1		三川村届	*			
48	清瀧村	海上町	90	20	軒別（一部）名主方泊	自村	*			
49	幾世村	海上町	75	8	龍福寺へ包札・茶	自村	*			
50	三川村村方	飯岡町	80	11	荷物十日市場村送　泊り　軒別	自村			1	敬神講結成願い
51	三川村町方	飯岡町	200	4		自村			1	敬神講結成願い

52	川口村	旭市	37	17	泊					
53	野中村	旭市	90	6		自村				
54	東足洗村	旭市	80	4		自村				
55	十日市場村	旭市	209	2	軒別　泊り名主方	自村		*	5	勧化願い
56	神宮寺村	旭市	140	8	泊り酒屋	自村		*		
57	大塚村	旭市	40	4		井戸野村預				
58	鎌数村	旭市	30	4	伊勢殿泊り					
59	琴田村	旭市	35	4		成田村届	*		11	合同敬神講
60	江ケ崎村	旭市	60	1		成田村届	*			
61	大田村	旭市	60	60	人足 14 人頼み軒別　酒屋泊り		*		15	合同敬神講
62	成田村	旭市	69	69	蕎麦屋泊　勧化世話人伊能屋		*			
63	網戸村	旭市	36	36	軒別	自村				
64	新町村	旭市	70	4	東屋醤油蔵初祈禱	諸徳寺集	*		17	合同敬神講
65	春海村新組	八日市場市	100	10		平木村集				
66	春海村元組	八日市場市	60	6						
67	平木川向村	八日市場市	8	4						
68	平木萩野村	八日市場市	30	2	講元宝積院					
69	平木村	八日市場市	200	14	2 泊札仕込む					
70	東谷村	八日市場市	30	13	軒別　泊り伝兵衛方　安養寺	自村		*		
71	椿村	八日市場市	40	13	吉祥院	自村		*		
72	篭辺田村	八日市場市	26	26	軒別	自村		*		
73	宮本村	八日市場市	14	14	軒別	自村		*		
74	西小笹村	八日市場市	140	16	軒別（一部）常宝院泊り	自村			2	富士先達家
75	長谷村	八日市場市	4	4	軒別	神宮寺村預				
76	東小笹村	八日市場市	100	2		神宮寺村預				
77	駒込村	八日市場市	33	1		井戸野村預				
78	井戸野村	八日市場市	200	44	軒別（一部）石橋方泊り	大田村送り				
79	上谷中村	光町	40	11	参詣者へ大札渡す	自村		*		
80	今泉村	野栄町	200	12	軒別（一部）小河方泊り	自村				
81	鏑木村	佐倉市	1	1	軒別	自村		*		
82	酒々井町	酒々井町	17	17	軒別講元佐野屋泊り	自村		*		
83	長沼村	千葉市	30	1	軒別　名主方泊り	自村		*		
84	行徳二股	市川市	46	29	軒別	自村		*		
85	新作村	松戸市	30	4		粟ケ沢村				
		計	3957	660			21	11	25ヶ村 582人	

表 4　明治 14 年「袖鏡帳」のみに記載の村

	村　名	現市町村名	軒数	訪問先	備　考	初　穂	木太刀	天保 3 年	明治14年	明治14年時の信仰形態
1	夏目村	東庄町							21	敬神講(太々講)
2	松沢村	干潟町							3	札遣ス
3	飯沼新田村	銚子市							6	敬神講
4	飯沼堂之下	銚子市							3	敬神講
5	外川浦	銚子市							34	敬神講
6	川口村	銚子市							1	門再建寄付頼むが？
7	下町	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
8	本田	銚子市							1	門再建寄付頼み受取
9	東通町	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
10	前田町	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
11	山中町	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
12	東芝下	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
13	西芝下	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
14	西芝上	銚子市							1	門再建寄付頼み受取
15	東芝上	銚子市							4	門再建寄付頼み受取

16	袋町	銚子市							6	門再建寄付頼み受取
17	飯貝根	銚子市							40	門再建寄付頼み受取
18	新生村	銚子市							10	門再建寄付頼み受取
19	三崎村	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
20	小浜村	銚子市							2	門再建寄付頼み受取
21	川端町	銚子市							2	敬神講
22	大橋町	銚子市							7	
23	辺田本村	銚子市							8	敬神講　配札願い
24	辺田村東	銚子市							8	敬神講　配札願い
25	辺田村西	銚子市							9	敬神講　配札願い
26	親田村	銚子市							2	寄付願い
27	橋本町	銚子市							8	神殿寄付願い
28	通穀町	銚子市							2	神殿寄付願い
29	下穀町	銚子市							2	神殿寄付願い
30	正明寺村	銚子市							7	敬神講
31	舟木台村	銚子市							10	合同敬神講
32	岡野台	銚子市							1	合同敬神講
33	新生村	銚子市							・	合同敬神講
34	新町村	旭市							18	敬神講（太々講）
35	下永井村	飯岡町							6	門再建寄付頼み受取
36	塙本村	飯岡町							4	敬神講
37	塙新田	飯岡町							38	敬神講
38	八木村	飯岡町							6	敬神講
39	飯岡本町	飯岡町							38	敬神講
40	横根村	飯岡町							2	
41	平松村	飯岡町							57	敬神講
42	常陸柳川	波崎町							31	敬神講
		計							994	

大田村では人足を一四人も頼んで処理している。しかし大田村からどこへ運んだかは書かれていない。これと比較するために、時代はかなりさがるが、一例をあげると、昭和初期まで行われていた北陸白山麓の冬期の物乞慣行では、物乞たちは、集まった米等を物乞地点から離れた定まった宿に預け、換金しながら歩いていた。[29] これを「追い担ぎ」と称していたが、大山御師の場合もこうした「追い担ぎ」のような能率の良い運輸システムが機能していたので、廻檀が可能であったと考える。

さて、表3・4の項目の中の「木太刀」というのは、宝暦年間の龍福寺の木太刀に朱書された村であるが、表1の五六ヶ村のうち二一ヶ村しか檀那場となっていない。この木太刀を奉納した講の中心は溝原村であるが、溝原村は天保三年では檀那場にはなっておらず、幕末期には檀那場になっているが、「廻壇帳」では「宿茂左衛門、守十本案内年番名主より出ス」とあるだけで特に「役元」等の役職もおらず、札や初穂の中継地にもなっていない。つまり大山講の中心にはなっていないのである。ただし、訪問先の一五軒の中には常光寺（浄光寺）とともに本寺の真言宗東栄寺も初穂を出している。

それゆえ、約百年前の宝暦十三年（一七六三）の段階では、溝原村を中心とする五六ヶ村一八〇名からなる大山講が形成されていたが、それは幕末期に東総地域を多く檀那場としていた大山御師増田源之進家とは関係がなく、不動明王が信仰されていた在地寺院の龍福寺を媒介にした自然発生的な参詣講であったと考えられる。あるいは、宝暦十三年（一七六三）当時檀那場としていた別の大山の御師の存在を推論することも可能である。しかし、明和年間（一七六四～一七七二）までの房総の檀那帳は内房のみであり、以後東総地域での講記録も文化年間以降であるから、この五六ヶ村を在地の自発的なものと考えた方が自然ではないかと考えたものである。

（4）大山御師増田源之進家の近代順回記録から—明治十四年「袖鏡帳」

さらに神仏分離後の講の実態と比較するために、記載形式が同一で、明治十四年（一八八一）五月にまとめられた『下総国順回諸記録袖鏡帳』（以下「袖鏡帳」）の内容も表3の末尾に表4として付加した。「明治14年」の欄に書かれた数値は、「檀廻帳」の「訪問先」と同じ初穂奉納者である。また、次の欄の「明治14年時の信仰形態」の欄には、その時どのような講が組織されていたかを箇条書きにした。これらを集計すると、幕末期「檀廻帳」の八五ヶ村の内二五ヶ村しか記載されておらず、初穂も約一八パーセントの五九二人である。ただし「袖鏡帳」に初めて記載された村が四二ヶ村もあり、初穂も九九四人から奉納されている。

こうした数値の変化には、背景として、大山敬神講への転換が考えられる。近代に入り、明治新政府の神道国教化政策にもとづく神仏分離令により、相模大山でも大山寺が廃され、大山不動から大山阿夫利神社に宗教施設が統一された。さらに、国学者権田直助が宮司となり、廃仏毀釈が徹底化され、ほとんどの寺坊が破壊された。同時に、各地の大山講を、新たに阿夫利神社参詣のための「大山敬神講社」と改めたのである。また、これを機会に御師は先導師と名称を変えた。増田家には権田直助が制定した敬神講社の規則が伝わっているが、その前文には「神祇を崇敬し先霊に追考し災厄を未前に防き、幸福を幽遠に拓き朝には皇恩の厚きを思ひ夕には神徳の深きをおもひ」とあり、それまでの大山講が大山不動参詣を目的としたのに対し、ひたすら神と天皇を敬うための思想結社と規定している。全文で一三ヶ条ある規則も、参詣のことは何も記載がなく、日常生活の心得が説かれている。

こうした大山そのものの変質によって、檀家側の信仰が大きく変化し、表3、表4で示された幕末期の檀那場の激減と新たな檀那場の形成という事態を招いたと考える。東総地域に多くの旧檀那場を保有する増田耕三は、早くから権田宮司に師事していたと伝えられ、唯一神道思想にもとづく「敬神講」の普及に努力したという。こうした普及活動にもかかわらず、多くの近世以来の檀那場は「敬神講」となることを拒否したと思われる。言いかえれば、木太刀を担ぎ大山不動へ参詣する講が、神道一色に変化した「敬神講」への信仰を拒否したためと考えられるのである。

例えば、筆者が調査した、明治二十年（一八八七）同じ大山先導師の内海景弓は、千葉郡や東葛飾郡、印旛郡から旧上総国の市原郡・夷隅郡で「敬神講」を勧めているが、八六ヶ村で受容され、構成員も二〇一三名を獲得し、大正五年（一九一六）には六四の「敬神講」が大山参詣を行っている。[30] それに比較すると、増田先導師の場合は、必ずしも順調な宗教活動ではなかったといえる。

さて、「袖鏡帳」に新たに記載された地名をみていると、現在の銚子市域が多いことが目に付く。やはり銚子港の舟運による経済力に期待したものと考える。実は、増田家には、海上町龍福寺の木太刀より大きい長さ四五七・五センチもの木太刀が明治二十五年（一八九二）に奉納され、現在でも保管されている。その銘文は、

（表）　阿夫利神社広前
　　下総国海上郡銚子町酒造杜氏
山崎清七　　伊藤庄□□
平野太郎右衛門　野口孫兵衛
河内庄兵衛　　富沢昇作
長谷川長治　　田辺浦次郎
（裏）　明治二十五年七月二十七日納之

とあり、酒造業者が納めたものであるが、銚子の経済力を誇る巨大な太刀である。

増田家が、近代に入り、近世には大山講がなかった村にも積極的に布教し、「敬神講」への加入を勧誘したことは、同家に「開導記編入願」が

多く伝来することでも理解できる。その中に一点以下のような内容のものがある。

（史料4）

開導記編入願

千葉県東葛飾郡八柱村高塚　全戸
千葉県香取郡栗源村岩部　全戸
同　同　助澤　廿戸

右村々ハ法華宗ニテ旧来ヨリ敬神之道薄ク、大山ハ勿論、伊勢大廟ニ至ル迄参詣ヲ厳禁之処、明治十七八年之頃、其当時之区長国体之犯ス可カラサル尊キ道理ヲ悟リ、中村弾林（壇カ）周囲十八ヶ村ヲ集合シ、神妙ノ道理ヲ解キ、敬神之志気ヲ起サシメ伊勢大山之参拝講ヲ組織到サシメテヨリ、毎歳講社代参人拙家ニ来リ、既ニ明治三十一年頃当社下社新築之寄付金ヲモ上納致シ候関係上、私受持場ニ致候間、開導記ヘ新ニ御記入被成下度、此段上願ニ及候也、

大正二年　　先導師　増田耕三（印）

この岩部村、助沢村（いずれも香取郡栗源町）は、近世以来いずれも強固な禁教日蓮宗不受不施派の村で、何人もの殉教者を出している。明治九年（一九七六）不受布施派が公許になると近村に教会所を建て、やがてこれを不受布施派寺院竜華寺として現在に至っている。こうした村が何故「敬神講」編入されているかは注目すべきである。

（5）大山信仰と大原幽学

増田家が東総地域に檀那場を拡げていた時期、檀那場となった長部村には大原幽学が滞在し、東総地域に性理学を普及させていた。幽学の仕法は禁酒・粗食・粗衣など多様であり、いわゆる滅罪寺院との寺檀関係にも否定的であったという。しかし、祈禱檀那である寺院について、すなわち民間宗教者の応接についての「規式」はどのようなものであったのであろうか。幽学は、『規式解』[31]の中で、「世俗多くは、所以も無く、又取留めたる事も無く、唯飾り来る数々を云い伝わりて、怪力の為めに、縁起が吉いの、悪ひのと、或は気をもみ心を痛むる者悉く多し」と、家例としての伝承に対する所見を述べている。そして「事の所以」を見極めて、家例を取捨選択すべしとしている。そして「仇欲狐は、身に祟るとの諺あり、故に先祖より正しき伝へ無き者は、兎にも角にも諸の説の中の吉を執り、是を心の法則と定めて規式すべし」というように、各自の考えで善悪を判断すべしとしている。

こうした幽学の思想を反映したものに、天保十四年（一八四三）隣村諸徳持村の菅谷又左右衛門の作成した「年中定礼控」では「十月朔日こわめし猿田参止、……廿日蛭子講止」など民間信仰のいくつかを廃止する条文が見られる。[32]実はこの諸徳持村は、大山御師増田家が信仰の拠点とした村で、前章のように、初穂の中継地点となっていた。ただし『檀廻帳』では菅谷氏の名は見えず、樋口屋利左衛門と永明寺が窓口となっている。同じ村役ながら性理学の熱心な信奉者たちは、やはりこうした民間宗教者を応接しなかったのであろうか。性理学の本拠地長部村は、『檀廻帳』では「名主遠藤伊右衛門殿、初穂惣右衛門殿、組頭弐人、切り札廿に軒」とあるだけで、特に拒否等の目立った記載はない。

よって、『檀廻帳』を見る限り、村単位のレベルで幽学の影響はみられない。1章で示した米込村のあまりに簡略化した大山参詣は看過できないが、両者を結ぶ有力な史料が見あたらないのが残念である。性理学は幽学が没し、維新を迎えると神道色を強めていったが、同じく神道を前面に押し出した宗教活動を展開した大山先導師増田耕三とは、他の地域とは異なり、むしろ共鳴したらしく、性理学の盛んな地域には「敬神講」が定着しているのである。

おわりに

以上、主に海上町龍福寺の木太刀を素材として、東総地域の近世・近代の大山信仰分析を試みてきた。筆者の力量不足から実態の明確な把握には至らなかったのが残念である。最後に、論点を以下のようにまとめ、今後の課題を付記したい。

一、宝暦十三年（一七六三）に奉納された木太刀は、溝原村を中心とする広範囲にわたる大山講の存在を示している。そして、この講の範囲は、特定の大山御師の檀那場とみるよりも、東総地域から不動信仰を集めていた龍福寺を媒介とする在地的性格の強いものであったと考える方が自然である。しかし、この確証を得るためには、在地の名主日記等から、江戸後期の大山信仰の記載を集めるとともに、御師側のより詳細な史料の発掘が必要である。

二、近世末期の段階で、東総地域は日蓮宗不受不施派地域を抜かして新義真言宗が卓越していた。その一方で、遠隔地参詣講は相模大山が多く、隣接する印旛郡や東葛飾郡で盛んな出羽三山講の史料は地元では見られない。檀家帳に記載された配布物について比較すると、大山は出羽三山よりも多彩かつ多量な土産を配布しており、増田家はじめ大山御師のこうした開拓努力が広範囲の檀那場獲得に結びついたとも考えられる。印旛郡等では大山と出羽と両方に属していた家や村も存在する。東総地域の大山信仰の寡占の理由を求めるには、他の参詣講との檀那帳や檀廻帳を中心とした緻密な比較研究が必要であろう。

三、いわゆる一村もしくは一家の中の参詣講の重複の問題については、御師側の活動に理由があるのではなく、受容する檀家側の柔軟な姿勢によるものであると考える。

四、大山信仰に対する、大原幽学の性理学の影響は管見のところ見受けられない。しかし、明治維新後神道化した性理学と、大山阿夫利神社宮司権田直助に師事した増田耕三の布教方針は一致したためか、性理学地域には「敬神講」が形成される場合が多い。

五、しかし、他の地域では、江戸時代からの檀家を「敬神講」に再編成できたのは二割に満たなかった。木太刀奉納に代表されるような大山不動信仰の要素を失い、神道化した教義を持つ「敬神講」を受容出来なかったものと考える。そこで、経済力のある銚子市街を中心に「敬神講」を募集するが、一応の寄付は集まったものの、実際に講社が結成されたのは近世の半数であった。この割合を、同じ大山先導師内海景弓の場合と比べると募集は順調ではなかった事が解る。

今後こうした史料分析を繰り返し、房総をはじめとした近代における大山信仰の変容を、神仏分離以外にも要因を求めながら明らかにしていく必要があると考える。

註

（1）全八冊　大山阿夫利神社蔵

（2）有賀密夫「大山門前町の研究―門前町の形成と御師の活動と檀家圏―」（『地域研究』一四　立正地理学会　一九七一年　後に圭室文雄編『大山信仰』雄山閣　一九九二年に所収）

（3）西垣晴次「大山とその信仰」（『郷土神奈川』一三　神奈川県立文化資料館　一九八五年　後に圭室文雄編『大山信仰』雄山閣　一九九二年に所収）

（4）大山寺別当八大坊宛徳川家康黒印状写（『改訂新編相州文書』第一巻）

（5）内閣文庫蔵。圭室文雄編『江戸幕府寺院本末帳集成』（雄山閣　一九七五年所収）

（6）鈴木宗朔「修験者中山作太夫廻国修行日記」（『くちくまの』七四号　紀南文化財研究会　一九八八年）

（7）圭室文雄「近世の伊勢原地域における高野山信仰」（『伊勢原の歴史』第八号）

（8）「永代ニ売渡シ申証文之事」寛文五年八月二十四日　伊勢原市大山　内海正志

（景弓）家文書（『伊勢原市史資料編　続大山』所収、以下同家文書は伊勢原市史編纂室写真版による）

(9)　「川向旦那帳」延宝三年二月四日（伊勢原市大山　内海正志〈景弓〉家文書（『伊勢原市史資料編　大山』一九九二年所収）

(10)　『伊勢原市史資料編　大山』所収「檀家帳等総目録」による。

(11)　伊勢原市大山　内海輝雄（式部太夫）家文書

(12)　「江戸檀那覚帳」宝暦十年九月（伊勢原市大山　内海正志〈景弓〉家文書）

(13)　「下総国村々泊覚帳」安永七年十一月（伊勢原市大山　内海輝雄〈式部太夫〉家文書）この史料は廻村日誌であり、正式な檀家帳ではない。檀家帳としては寛政八年（一七九六）年十一月の同家伝来「下総国行徳領旦家帳」が初出となる。

(14)　「下総国十日市場村々軒別帖」（伊勢原市大山　増田弘（源之進）家文書）

(15)　田中宣一「相州大山講の御師と檀家—江戸末期の檀廻と夏山登山をめぐって」（『日本常民文化紀要』八巻二号　一九八二年　圭室文雄編『大山信仰』雄山閣　一九九二年に所収）

(16)　鈴木章生「相模大山信仰の成立と展開—民衆参詣の動向と信仰圏をめぐって—」（『秦野市史研究』六号一九八六年　圭室文雄編『大山信仰』雄山閣　一九九二年に所収）

(17)　吉岡清司「大山信仰と納太刀」（『海上町史研究』一六号　一九八三年。後に圭室文雄編『大山信仰』雄山閣　一九九二年に所収）

(18)　『海上町史』総集編（一九九〇年）「地区の歴史　岩井村」、吉岡清司「海上町の寺院と神社　龍福寺」（『海上町史研究』二三号　一九八五年）参照。

(19)　吉岡清司　前掲註（17）

(20)　伊勢原市大山　増田弘（源之進）家文書

(21)　『干潟町史』（一九七五年）

(22)　干潟町米込杉崎家史料　大原幽学資料館所蔵

(23)　拙論「近世の大山講と大山御師—上総国作田村の大山講史料を中心に」（『山岳修験』一八　一九九六年）

(24)　御師は、神仏分離以降は大山敬神講社を結成する先導師となった。

(25)　田中宣一「明治初期における大山講の分布」（『日本常民文化紀要』八巻二号　昭和五十七年　圭室文雄編『大山信仰』雄山閣　一九九二年に所収）

(26)　『伊勢原市史資料編　大山』解説（一九九二年）

(27)　拙論「出羽三山講」（『千葉県の歴史』別編　民俗1総論　第4章「社寺と祭り」二〇〇〇年）

(28)　拙論「近世俗聖に関する一考察—時宗配下沙弥を中心に—」（圭室文雄編『民衆宗教の構造と系譜』雄山閣　一九九五年）

(29)　拙論「中部白山麓焼畑住民の季節的放浪慣行」（『国立民族博物館研究報告』8巻2号　一九八三年）

(30)　拙論「講と社寺参詣」（『千葉県の歴史』民俗Ⅱ　二〇〇三年所収）

(31)　「大原幽学関係歴史史料」大原幽学記念館所蔵、同史料は『大原幽学全集第一巻』（千葉県教育会館維持財団　一九七二年）に所収されているが、本論では国立歴史民俗博物館所有の大原幽学記念館所蔵原本写真を使用した。

(32)　大原幽学記念館所蔵　菅谷家文書

本論を執筆にあたり、海上町龍福寺の住職土川峰仙師、伊勢原市大山の増田弘氏、干潟町大原幽学記念館の鈴木映里子氏には多大なご協力をいただいた。また、明治大学の圭室文雄先生にもご教示をいただいた。厚く御礼申し上げる。特に、国立歴史民俗博物館の高橋敏先生には、ご指導をいただきながら筆者の怠慢により、原稿の遅延等で大変ご迷惑をかけた。お礼とともに深くお詫びする次第である。

（國學院大學栃木短期大學日本史学科、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了）

The Sagami Oyama Faith in Toso during the Early Modern Period: Various Issues Surrounding the Re-organization of Parishioner Association

SUGANE Yukihiro

Sagami Oyama in Isehara City, Kanagawa Prefecture was the center of a faith that dates from ancient times that had a great many followers from mainly the Kanto region. Considerable work has been undertaken by TANAKA Sen'ichi and others on the activities of the Oyama priests who contributed to the dissemination of this faith. In other words, there have been attempts to demonstrate numerically from records passed down through the families of these priests the process through which this faith prospered at the end of the Edo period, largely through the Oyama Fudo temple.

The object of this paper is to conduct a study on the formation and development of the Sagami Oyama faith from the Edo period through to the first half of the twentieth century using the Toso region in Chiba Prefecture as a model on the basis of previous research and materials from some of the faith's followers. The method adopted for this study first entails an analysis of the inscriptions on wooden swords presented as offerings in 1763 to Ryufuku-ji temple in Unakami-machi and related materials, for examining the sphere of the Oyama faith in this region and the structure of Oyama associations. This data is also matched against the records of Oyama priests who gave the followers accommodation. By restricting the region under investigation and conducting a comparison of materials from those who contributed to the faith and those who accepted the faith in this way, the methods by which the religious leaders obtained their faith and the conditions for accepting the faith on the part of the believers becomes clear. Next, I study the changes to the faith as a result of the forced separation between Shintoism and Buddhism, and the response of followers to this separation. In other words, mainly through materials that belonged to the Oyama priests, I study the reaction of the people in the Toso region to the abolition of Oyama Fudo, where the wooden swords were presented as offerings, and the shift to a unilateral focus for the faith centered on Aburi Shrine.

These studies reveal that during the middle of the Edo Period the Oyama faith in the Toso region was characterized by a physical presence mainly centered around Ryufuku-ji temple. However, at the end of the Edo Period the enthusiastic development of family temples following the danka system (temples supported by their parishioners) by the Oyama priest MASUDA Gennoshin in the Toso region resulted in the formation of Oyama religious associations that served as a type of religious fraternity. However, even though from the start of the Meiji period the Oyama establishment pursued the separation of Shinto and Buddhism and attempted to reorganize the Oyama Fudo association into Keishin associations that are based on the Shinto religion, it was

only about 20% successful in its attempt to do so. Although the relationship between the dissemination of the Oyama faith and the spread of the Neo-Confucianism of OHARA Yugaku in the Toso region at the same time is not clear, it is evident that Keishin associations were formed in the regions where there was Neo-Confucianism, though it is questionable that Neo-Confucianism that had turned to Shinto from the Meiji period matched the teachings of the Keishin associations.

海上町龍福寺奉納木太刀（宝暦 13 年）

海上町龍福寺木太刀の朱書